

河原町埋蔵文化財調査報告書 第3集

鳥取県河原町
下中溝遺跡発掘調査報告書

1986

鳥取県八頭郡河原町教育委員会

河原町埋蔵文化財調査報告書 第3集

鳥取県河原町
下中溝遺跡発掘調査報告書

1986

鳥取県八頭郡河原町教育委員会



序 文

この報告書は、河原町大字釜口字下中溝に所在する埋蔵文化財の調査記録であります。

本町は千代川と八東川の合流により形成された沖積地で古くから稲作を中心とした農業、それらにまつわる宗教、文化が開けた町であります。

今回の発掘調査は土地改良事業（釜口地区ほ場整備工事）に伴って予期せぬ場所から遺物の散布を見たものであります。この散布地に近接して鳥取県砂防利水課で計画中の堀川荒廃砂防工事用地として残した一部の水田の発掘調査であります。

この調査にあたり調査関係者の各位をはじめ、懇切なるご指導をいただきました方々に厚く感謝の意を表する次第であります。

この調査記録が今後の調査、研究の一助となれば関係者一同の喜びとするところであります。

昭和61年3月

河原町教育委員会

教育長 蓮 佛 金 吾

例 言

1. 本報告書は河原町教育委員会が鳥取県土木部から調査の依頼を受け1985年7月9日～1985年7月31日の間に実施した鳥取県八頭郡河原町大字釜口字下中溝⁴⁷⁹₄₈₁₋₁番地に所在する祭祀遺跡の発掘調査記録である。
2. 調査関係者は次のとおりである。

調査団長	蓮佛金吾 (河原町教育委員会教育長)
調査指導	野田久男 (鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長) 絹見安明 (鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事)
調査員	中島弘隆 (河原町教育委員会)
調査協力	鳥取県埋蔵文化財センター 鳥取県郡家土木事務所砂防利水課 河原町産業課 (釜口地区ほ場整備組合)
事務局	西尾繁雄 (河原町教育委員会教育課長) 下田芳樹 (河原町教育委員会教育課長補佐)
3. 本書は絹見安明の指導のもとに中島弘隆、小谷和章 (前河原町教育委員会教育課長補佐) が協議し、河原町教育委員会が編集作成した。
4. 挿図中の方位は磁北を示す。
5. 報告書作成にあたって、森田純一氏 (河原町立河原第一小学校教諭) にご助言、ご教示を頂いたことに厚く感謝いたします。

本 文 目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経過	2
III 調査の概要	3
IV 調査の結果	3
1. 遺構について	3
2. 遺物について	3
a. 土 器	3
b. 石 製 品	4
c. 土 製 品	4
V ま と め	5

挿 図 目 次

挿図 1	下中溝遺跡周辺遺跡位置図	1
挿図 2	下中溝遺跡周辺地形図	3
挿図 3	出土遺物実測図(土器)	4
挿図 4	出土遺物実測図(石斧)	5
挿図 5	出土遺物実測図(土馬)	5
挿図 6	出土遺物実測図(獣形土製品)	6

図 版 目 次

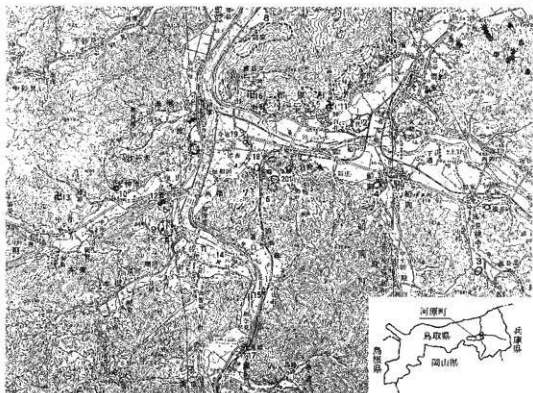
図版 I—1	遺跡近景(南西から)
2	遺跡全景(西から)
図版 II	石 斧
図版 III	土 馬
図版 IV	獣形土製品

I 位置と環境

下中溝遺跡は、鳥取県八頭郡河原町大字釜口字下中溝⁴⁷⁹₄₈₁₋₁番地に所在する。国鉄因美線国英駅から約200m用瀬寄りで砂防指定河川堀川との交差する地点の線路沿、北流する千代川右岸、釜口部落と六日市部落の間に位置する。

縄文・弥生文化に関する資料は、前田遺跡(18)で縄文土器が1片認められ、弥生土器も5片認められており、上土居遺跡(19)の遺物散布地でも弥生中期の土器が数片認められる程度であるが、本町は千代川と八束川が合流し、更には曳田川が合流する沖積平野を囲む微高地にまだ多くの集落遺跡が埋蔵されていることも考えられる。

古墳時代になると町内でも丘陵や山地に古墳が築造され、現在総数127基を確認している。そのうち前方後円墳は三基確認されており、中でも曳田の楳古墳(5)は全長50mの前方後円墳で八頭郡内では最大の規模を誇る。また、本遺跡の所在する千代川流域左岸には佐賀の大平古墳群(9)が点在している。大平2号墳は全長8.4mを測り横穴式石室を内部



挿図1 下中溝遺跡周辺遺跡位置図

- | | | |
|---|--|---|
| <p>凡 例</p> <p>X 遺物出土地</p> <p>○ 散布地・集落跡</p> <p>▲ 副塚出土地</p> <p>○ 古墳群</p> | <p>● 前方後円墳</p> <p>● 円墳</p> <p>◎ 祭跡</p> | <p>1. 下中溝遺跡</p> <p>2. 万代寺遺跡</p> <p>3. 牧野遺跡</p> <p>4. 丸山遺跡</p> <p>5. 楳古墳</p> <p>6. 郷原古墳群</p> <p>7. 山手古墳群</p> <p>8. 船倉古墳群</p> <p>9. 大平古墳</p> <p>10. 天神原古墳群</p> <p>11. 土師百井庵寺跡</p> <p>12. 式内社売沼神社</p> <p>13. 羽栗山妙雲寺跡</p> <p>14. 丸経南土地</p> <p>15. 洲経南土地</p> <p>16. 長勝寺</p> <p>17. 大安興寺</p> <p>18. 前田地跡</p> <p>19. 上土居遺跡</p> <p>20. 郷原遺跡</p> |
|---|--|---|

主体とする古墳で、その石室の南東約2m位の畑では陶棺も発見されている。曳田川をさかのぼった天神原、牛戸地区からは須恵器の窯跡が確認されており、天神原の窯跡(10)は六世紀後半頃のものと考えられ、附近にも集落遺跡が埋蔵されている可能性がある。

古事記所載事項について考えてみると、その中の一条に八上姫のことが記されている。八上姫の居住の地は確定し難いが、それが単なる伝説にすぎないとしても、伝播と言うことを考えてみた場合、その伝説を運んだ人々があった事が考えられる。このことは古事記の書かれた奈良地方と八上姫の伝説地たる本町との間に古くから道が開け、古くから交通の要衝として栄えた町であることが窺われる。

中世において当町域で注目される出土遺物は、明和7年(1770)に発掘された中井の羽黒山妙玄寺跡(13)で大小7つの白銅の経筒に経文が18巻検出されている。また八日市字滝谷(14)出土の瓦経、釜口字西上居(15)出土の銅鉦、郷原の前田遺跡出土の呪札とミニチュアのくり抜き舟等、信仰にまつわる文物である。

今回の発掘調査の対象となった一区画は上馬の出土等祭祀遺跡であったにせよ、他の生活関連の出土遺物の状況から判断すると附近に集落遺跡があったことが窺われる。

II 調査に至る経過

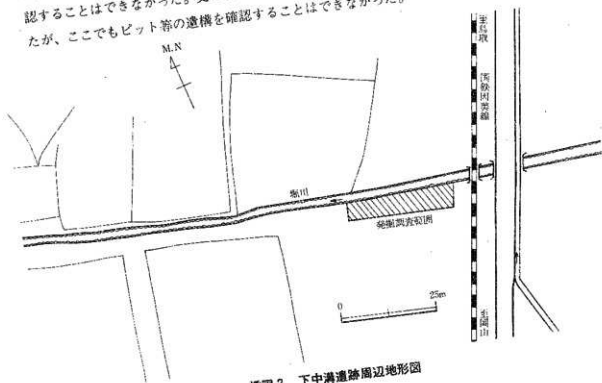
昭和56年度から昭和62年度までの6ヶ年計画で面積38.6haの土地改良事業(釜口地区ほ場整備工事)が着手された。本地域では字西上居で銅鉦と古銭が出土したことがあるが、釜口地区ほ場整備区域内に埋蔵文化財が存在することは地域住民はもとより文化財関係者も知らなかった。そして工事着手から4年次の昭和59年4月中旬頃、町内小学校児童が土器を発見した時点で遺跡存在の可能性を知ったのである。

早速現地に行ってみるとほ場整備工事は通年施行で前年の晩秋あるいは初冬にかけての工事であり、基盤がすでに造成され耕作土は畦畔内の中央部分に盛土された状態で、基盤面を踏査して見たがピットは確認されず、須恵器片がわずかに散布している状態であった。また隣接して、基盤造成が完了した田圃を踏査したが、一片の土器も確認されなかった。しかし、遺物の散布していた田圃の切土面を調査したところ国鉄の線路敷と河川改修のため残地として残された堀川左岸の切土面に土師器片が混ざっているのを確認したのである。

その結果、事業主体である河原町と堀川荒廃砂防工事を施行する郡家土木事務所に具体的な保護策について検討したところ、ほ場整備事業については堀川から右岸の未着手部分について、切土となる工法は変更し、遺構があると思われる部分はそのまま保存することに決定したが、河川改修のための残地については上流200mまで改修が完了しており保存することが不可能であるとの結論を余儀なくされ、発掘調査を実施することとなった。

Ⅲ 調査の概要

河川改修の用地として残された145.4㎡を残してほ場整備は完了していた。調査は1985年7月9日から実施し耕作土(30cm)床土(10cm)の層を除去すると遺物包含層に達したので、その層に達するまで調査区域全体の土を除去したが、ピット等の遺構を確認することはできなかった。更に20cm下に土層の変化が見られたのでこの層まで掘り下げたが、ここでもピット等の遺構を確認することはできなかった。



挿図2 下中溝遺跡周辺地形図

Ⅳ 調査の結果

1 遺構について

今回実施した発掘調査では、既に削られて消失してしまったものか、或いは、もともと遺跡が存在していなかったのかは解からないが、遺構を確認することは出来なかった。

2 出土遺物について

出土遺物は土器、石製品、土製品である。遺物のすべては今回の発掘調査に伴うものでなく、工事中に地元の小学生が発見した遺物であり、出土状況等詳細については不明である。

a 土器〔挿図3、図版Ⅲ〕

縄文時代から室町までのものが出土している。その破片数は約200点で、ほとんどが細片になっており器種、器形の判別できるものは極めて少ない。出土土器の大半は須恵器であり、この遺跡が最も活用された時代が窺える。

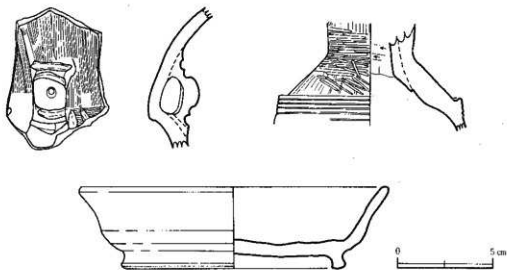
b 石製品

石斧〔挿図4、図版Ⅱ〕 定角式磨製石斧が一点出土している。この石斧は三味線割で鋸刃となっており、縄文時代後期から弥生時代中期にかけて使用されたものと推測されるが鋸刃の一部が欠損して使用痕となっている。

c 土製品

土馬〔挿図5、図版Ⅲ〕 須恵質の製品である。奈良・平安時代のもものと推測されるが、この製品は装飾を大いに施した土馬であり、鞍はもちろんのこと背中後部には雲珠を飾った穴、その雲珠を取りまく紐、また頭部の面がい等で飾った跡が変色して残っている。またこの土馬は空胴になっている。

獣形土製品〔挿図6、図版Ⅳ〕 土師質の製品である。古墳時代から奈良時代後半のもものと推測されるがこの土製品の特徴としては、粘土を紐状にして輪を作りこれを貼り付けて目を表現しており突出している。また顔全体を見ると、やや丸型で怪獣を思わせるような土製品である。

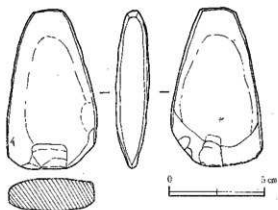


挿図3 土器

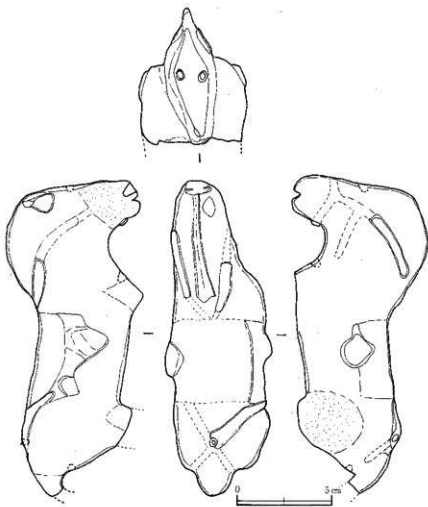
V ま と め

1. 遺跡について

ト中溝遺跡は発掘調査区域での遺構及び遺物は検出されなかったが付近では多くの土器片が出土しており集落遺跡が存在していたことが窺われる。そうした集落の空地、あるいは集落の外で呪儀を行ない呪験を得ようとして本調査区域に隣接した壺川を土製品の投入



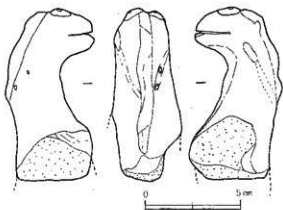
挿図4 石 箭



挿図5 土 馬

の場として選んだ可能性が強いのである。

瓶川は古代・中世にかけては護岸も築造されず、流れるがままの谷川であり、出水のたびに南北に河床は移動したことが窺われる。近世になって河川改修が行なわれ護岸も築造されたものと考えられるが、呪儀、呪法を行った後に投入された時点では河として息づいていたのである。



挿図6 獸形土製品

石斧、土製品の検出位置は定かではないが、石斧については、郷川が氾濫しても被害を受けない場所での集落遺跡と推測され、土製品（土馬、獸形土製品）については、投照された河川附近の祭祀遺跡と推測されるであろう。

2. 出土遺物について

本遺跡附近では多くの土器を始め、石製品、土製品が検出されその大半は、須恵器で皿類が主体を占め、その他埴、鍋類、壺類が少々出土している。また、石製品は定角式磨製石斧が1点出土している。

今回の出土遺物の中で注目されるのは土馬と獸形土製品が各1点出土したのであるが、これら二つの土製品に共通していることは、藤沢一夫教授談（毎日新聞1983・6・17）によれば、神にささげるいけにえの代りとして神前に供えられた祭器であったと推察される。特に穀物の収穫には水は最も必要なものであり、かつ水期の雨ごいの神事などで溝に沈める場合が多いということであり、本遺跡の場合も同じことが言えるのである。

昭和57年度に発掘調査を行った本町、郷原に位置した前田遺跡と本遺跡とを結ぶ柏越えは、伝説、伝承の多い峠であるが、伝説等が多いということは、この峠が交通の要衝として発達したことを物語っている。前田遺跡で二基の井戸から検出された呪札と今回出土した土製品にしても、これらを授けた陰陽師と呼ばれる呪者または聖が本峠を歩き来たと想像される。はじめにも述べたところであるが、本町域では羽黒山妙女寺跡出土の経文、釜山西土居出土の銅鉿、八日市出土の瓦経等信仰にまつわる文物も多く、庶民信仰が盛んな地域でもあり、本遺跡出土の土製品とも深い係わり合いを持つものであろう。

圖 版

(I ~ IV)

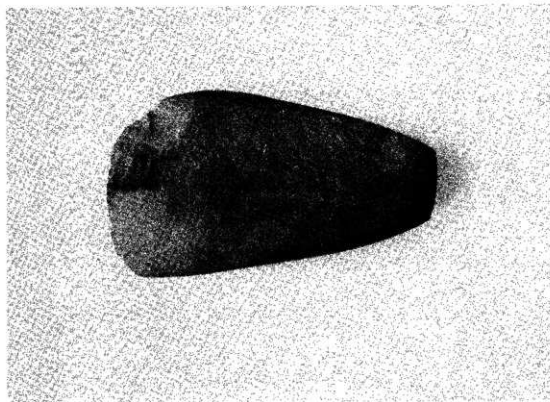
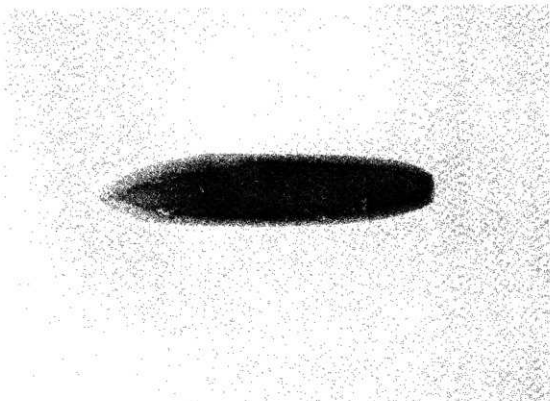


遺跡近景 (南西から)



遺跡全景 (西から)

図版Ⅰ(石斧)





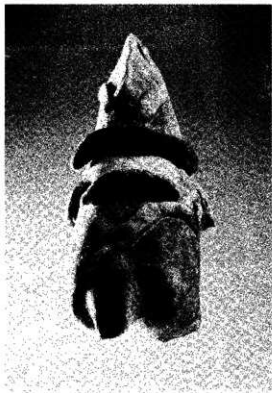
(側面)



(前面)



(下面)



(後面)



(側面)



(側面)



(上面)



(前面)

下中溝遺跡発掘調査報告書

発行日 1986年(昭和61年) 3月

発行者 河原町教育委員会

〒680-12

鳥取県八頭郡河原町大字渡木277-1

T E L (08588) 5-0011

印刷 谷岡印刷

〒680 鳥取市元町126

T E L (0857) 26-2001